

1 条件設定に当たって

人間は重要な判断に迫られる状況において深く思考する。それは意思決定が他に様々な影響を与える可能性があるからだ。ものごとを判断する場において必要なのは、状況と目的の明確化である。そのために必要になるのは情報の収集・分析と再編集である。状況を俯瞰するために、情報を収集・分析し、目的の奥に潜む判断のための価値をもとに再編集することで、一つの判断に対するメリットとデメリットがはっきりする。正しい判断とは、そのメリットの内容が目的に対して最も近く、デメリットが最も少ない結論を選ぶことだと考えられる。

このような思考プロセスを伴った判断をする子どもを学習活動においてはぐくむ活動が「であう・つながる・うまれるコミュニケーション」であると捉え、以下にその条件を設定する。

- ・条件A 発言が学習活動をつくることを意識する
- ・条件B さまざまなパターンの情報を分析する
- ・条件C 判断のための価値を明確にする
- ・条件D 思考プロセスを言語化する

2 条件について

・条件A 発言が学習活動をつくることを意識する

学習活動へ入るためには、その活動を行う必要感がなければならない。その必要感とは、子どもの心の中に生まれる疑問点を明確にしたいという気持ちがもとになるであろう。コミュニケーションも子ども内から発生したものではなくては、真の目的を失い形骸化する。今はっきりしないことは何か、そしてそのためには何をすべきなのかを子どもが表出し合うことで、活動の目的を共有することができるのではなかろうか。それが主体的に学習を進める態度を育み、さらにはコミュニケーションそのものも活性化する。そのためには子どもの発言が学習活動をつくることを子ども自身が意識していることが大切である。

・条件B さまざまなパターンの情報を分析する

提示された情報というのは、話し合いに対する共通の土台となる。その質や量を変化させることで、子どもの判断に至る思考プロセスも変化する。思考力・判断力・表現力を育てるためには、判断のために比較・分類・類推・定義・順序付け・関連付けなどの思考を必要とする課題とそれに伴った情報が必要となる。例えば、対になった情報は比較することで、両方の共通点や相違点から課題に迫ることができる。また、一見無秩序に見える情報であったり、多くの情報があったりする場合は、要素ごとに分類することから見つかる規則性や新しい視点から課題に迫ることができる。また子どもがあいまいに捉えている情報は、定義付けや順位付けをすることでより正確な判断が可能になる場合がある。

・条件C 判断のための視点を明確にする

ある判断において正当な根拠があれば、その判断は正しいと言えるのだろうか。それは、否である。なぜならその状況によって、優先すべき視点が違うからである。取り出した情報量やその解釈が違えば、優先すべき視点も違い、当然その判断が異なってくる。正当な根拠をもつ二つの判断が対立している場合に話し合いが収束に至らないことがあるのは、その優先すべき視点が明確になっていないことが多い。視点を明確にし、時にはその優先順位を共有することで、互いの判断について理解し合うことができると考える。

・条件D 思考プロセスを言語化する

人間は判断に至るプロセスにおいて、比較・分類・類推・定義・順序付け・関連付けという思考を無意識に活用している。そのプロセスを明確にすることで、結論に至る根拠だけを明確にするよりも、判断が論理的に正しいものかどうかを見定めることができるようになる。

また、判断に至った思考のプロセスについて自覚することができれば、次に同じプロセスを活用することができる。また、他の人のプロセスを知ることによって、より論理的な思考に出会うことができる。

3 おもな実践

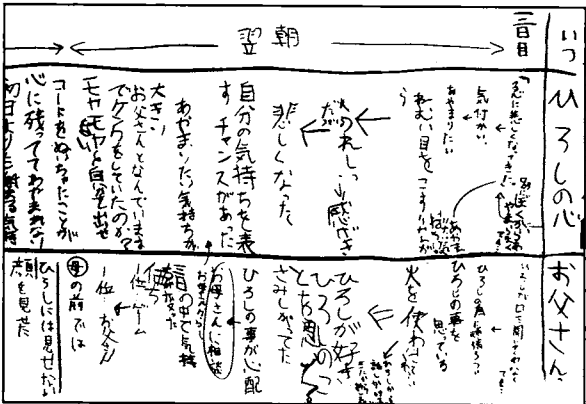
条件A～Dについては各教科の授業場面の中でも設定しうる条件であると考えられる。そこで、特定の教科にとらわれず、授業場面の意図的な働きかけとその分析を通して、実践を積み上げることとした。

・条件A 発言が学習活動をつくることを意識する

日常的な授業においても次の学習活動は何をするべきかを考える場をもつことで、目的にあった学習展開を主体的に選ぶことが可能となる。選んだ学習展開によってどのような話し合いになったかを授業者が評価し、学習集団にフィードバックすることも大切であると考えられる。

国語科「カレーライス」では、主人公ひろしとお父さんとの心の動きを叙述から読み取る学習を行った。この学習場面では、授業導入段階で授業者が課題を提示した後、子どもに進行を任せて授業を進めることにした。黒板はどのような形で書けばよいのか、誰が書くのかを話し合い、黒板は表形式で、発言した子が次の子の意見を書く方式の板書に決まった。解釈について意見が割れるときは、「この部分を話し合いませんか。」という意見を出す。または、皆に「どうしてこうなると考えられるのですか。」という質問をする。子どもの話し合いだけでは解決しない場合は授業者が入り授業を進めていった（資料1）。

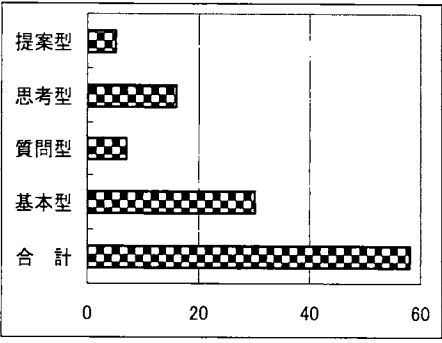
授業中、授業者は子どもの意見を内容ごとに分類した。発言の種類を四つの型に分け、誰がどの型の発言を何回したのかをカウントしていった。四つの型とは、①提案型（「今から〇〇しませんか」と促す発言）、②思考型（比較・分類・類推・定義・順序付け・関連付けなどの内容が入っている発言）、③質問型（「〇〇はどういう意味ですか」などの質問を投げかける発言）、④基本型（①～③以外の発言、教師への一方向的発言）である。授業後、その分析結果（資料2）を子どもに提示した。①～④の型の数の棒グラフをもとに、授業で何が足りないのかを子ども自身が考えることで、④基本型だけの授業展開では、子どもだけで、授業を組み立てることは難しいと自分たちで気付くことができるようになった。また、①～③の型は、授業の流れをよく知らなければ発言できない。つまり、よく互いの話を聞くことが大切なのだという意識も高まることにつながった。この授業分析を繰り返し子どもに示すことで、授業形態が教師主導型の学習から、学習展開を主体的に考え、かかわり合いの生まれる学習へと変化していった。



資料1 子どもに進行を任せた授業の板書

また、子どもの必要感に沿った学習展開をつくりあげるために、ワークシートには教師の意図的な学習展開が見えるような学習活動等の文章を載せず、空欄を設けただけのワークシートを用いた。これは、「次の空欄では、〇〇について考えたことを書こう」のような考えを引き出すことができるのではないかと考えたからである。

学級活動「学級力を向上させよう」では、国語科「カレーライス」で培った授業形態をもとに、授業者が課題を提示し、その解



資料2 発言の分類とグラフ化の例

は、「なかよしのクラスになることが最も大切だ」という意見が支持された。つまりこの意見に沿った視点を優先にすることが大切だと共通理解できたのである。最終的に「よい雰囲気」のあるクラスにするために対策を考えることが明確になった。判断のための視点を明確にするステップを踏んだことで、対策を考える際に「よい雰囲気」をつくるための活動を考えるという方向に意識が焦点化された。

・条件D 思考プロセスを言語化する

音声言語でのかかわり合いだけでは、自分の結論に思考プロセスを加えながら話すというのは難しい。そのため、自分がどのような思考を行ったかを言語化するために、二つのステップを踏むことにした。まず、比較・分類・類推・定義・順序付け・関連付けなどの思考そのものが、結論にどのような影響を及ぼすかを知ることが必要である。そこで、比較する視点や分類する視点が異なると最終的な結論が変わってくるという学習経験の場を日常的な授業の中で設ける。次に文章で自己の思考プロセスをまとめる。例えば、比較では何と何をどのような視点で比較したのか、分類ではどのような視点でグループに分けたのかという部分を逃さずに文章化する。この文章を基にした話す・聞く活動を行うのである。

社会科「貴族の暮らし」では、「貴族の生活をしたいか、したくないか」という課題を用意した。子どもからは、資料をもとに「一日の生活のうち、遊んでいる時間が長いから、貴族の生活をしたい。」や「お風呂にあまり入っていないので貴族の生活をしたくない」などの意見が出された。また、「弥生時代の生活と比べるといろいろなものを食べているのでしたい」「武士だったら戦いに行かなければならないので、貴族の生活がしたい」という意見も出された。子どもは無意識だったのだろうが、それぞれの判断のもとになる思考プロセスについて整理すると主に二つに分けられた。一つ目は、現在の私と貴族との比較である。二つ目は、別の時代の人など貴族とも自分とも違う人との比較である。一つ目の比較は、「貴族の生活をしたくない」という判断に至りやすい。また、二つ目は「貴族の生活をしたい」という判断に至りやすい。つまり同じ子どもでも、どのような比較をするかによって判断は異なってくる。実際に一つ目のように比較してみた子は二つ目のように比較し、二つ目のように比較していた子は一つ目のように比較してみると意見が逆になった。つまり、比較する視点が変わると結論も変わってくるのである。この経験から、その後の授業において「武士の生活をしたいか、したくないか」という課題を用意したときには、「比較の視点を全員そろえたほうがよいのではないか」や「何と武士を比較した結果の考えなのかはっきりさせたほうがいいのではないか」という意見が子どもから出るようになった。同じ資料を根拠にしている思考プロセスが違えば判断が変わることに、子ども自身が気付くきっかけとなったのであろう。

学級活動「学級力を向上させよう」では、月ごとのチャートグラフを比較することで、学級力の変化を読み取ることができる。課題に対してどのような思考プロセスでその結論に至ったのか文章化しやすいように、キーワードとなる言葉を思考アイテムと名付け子どもに提示(資料6)し、「この思考アイテムのうち考えている中で使ったものは文章に入れよう」とアドバイスした。記述では何と何を比較したのが明確になり、その後の発言でも「〇〇と△△を比較したのですが…」という意見が多くなった。思考プロセスが明確になったことで、子どもが結論を論理的に導き出されたものかどうか重要だと気付くことができた。

思考アイテム		
比較	類推	分類
原因	活用	定義
関係づけ	順位づけ	
～から考えると		

4 今後に向けて

資料6 言語化のためのキーワード

前述のように、条件A～Dについてそれぞれ一定の成果を見出すことができた。しかし、子どもに授業の進行を任せる過程では、話し合いを重視するため授業者の意図と違う方向に進んでいく場面が度々あった。また、判断の視点を明確にする重要性をまだ感じていない子どもも多い。今後の実践の中で、これらの課題についても取り組んでいきたいと考える。最後に、今回の実践「学級力を向上させよう」では、新潟大学附属小学校の実践*を参考にさせていただいた。厚くお礼を申し上げたい。

*参考図書 『「学級力」で変わる子どもと授業』新潟大学附属小学校著(明治図書出版)